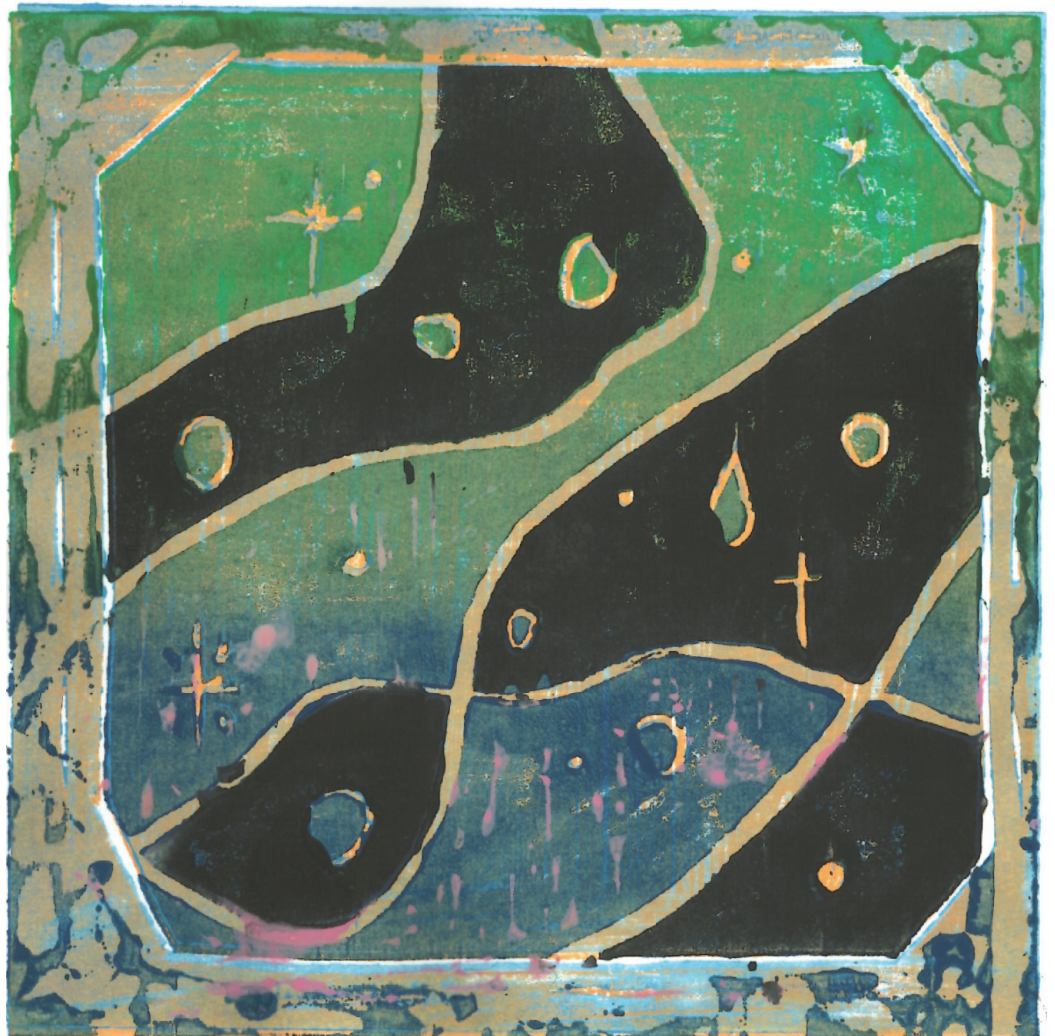


Total Rehabilitation Research

Printed 2017.2.28 ISSN2189-4957

Published by Asian Society of Human Services

*F*ebruary 2017
VOL. 4



Hitomi Murakami

[Feel at Heart]

ORIGINAL ARTICLE

抑うつにおける記憶バイアスに特性メタ感情が及ぼす影響

～うつ病の予防・再発防止に向けて～

田上 恭子¹⁾

1) 愛知県立大学看護学部

<Key-words>

抑うつ, 記憶バイアス, 特性メタ感情, 過程分離手続き

tagamik@nrs.aichi-pu.ac.jp (田上 恭子)

Total Rehabilitation Research, 2017, 4:10-24. © 2017 Asian Society of Human Services

I. 問題と目的

1. はじめに

日本では現在, うつ病やメンタルヘルスの不調, 自殺の問題に対する関心が高まっており, 職場における過労やうつ病の増加といった社会問題や抑うつの低年齢化の問題が指摘され, うつ病や自殺は日本の社会が取り組むべき最優先課題のひとつであるといわれている(坂本・丹野・大野, 2005)。うつ病の診断には至らないまでも, 災害や不況などによるさまざまな喪失体験によって抑うつ症状が生じたり, 抑うつ気分悩んだりしている者の数は計り知れないだろう。本研究では, うつ病という診断には至らないが誰もが経験し得る抑うつ状態(depression)に着目する。坂本(2002)によれば, うつ病の診断基準に満たない抑うつ症状が1年後のうつ病の危険因子になるという報告もあるという。したがって, 非臨床的な抑うつ状態を対象とした研究による知見はうつ病の予防や再発防止に何らかの示唆を与え得るものであり, メンタルヘルスの不調の早期対応にも役立つものであると考えられる。

2. 抑うつにおける認知バイアス

憂うつなときには, 過去の失敗ばかりが思い出されてきたり, 自分がどうしようもない人間であると感じてしまったりすることがある。落ち込んでいるときには先が全く見えなくなってしまうこともあるかもしれない。このように抑うつは私たちのものの見方や考え方, すなわち認知と深く関連していることが知られている。これまで臨床心理学や認知心理学などの領域において, 抑うつと認知との関連について数多くの研究が蓄積され, ひとつの大きな特徴として抑うつ状態ではネガティブな認知が生じやすいことが広く知られている。

中でも, 気分一致効果(mood-congruent effect)に焦点を当てた研究は, 1970年代後半より非常に数多く行われてきた。気分一致効果とは, ある気分状態のときには, その気分

Received
January 23, 2017

Accepted
February 14, 2017

Published
February 28, 2017

一致した、ポジティブ・ネガティブ、快・不快などの感情価 (affective value) を持つ認知が促進されるという現象である。抑うつにおける気分一致効果とは、抑うつにおけるネガティブな認知を、抑うつというネガティブな気分や状態とネガティブな感情価を持つ認知の一致現象ととらえるものである。抑うつ状態の発症・持続・再発にはネガティブな認知と抑うつ的な気分の悪循環がかかわっており、その悪循環に気分一致効果が重要な役割を果たしていると考えられている (Blaney, 1986)。この気分一致効果とその説明は認知行動的病理学の基礎理論のひとつに位置づけられてもいる (越川, 2010)。

これまでの抑うつにおける気分一致効果研究から、特に過去経験や自己にかかわる出来事に関する記憶、すなわち自伝的記憶 (autobiographical memory) の想起に関して、抑うつ者がネガティブな側面を思い出しやすいことは信頼性の高い現象であると論じられている (Williams, Watts, MacLeod et al., 1997)。また、実験的な記憶材料を用いた抑うつにおける記憶再生の気分一致効果研究のメタ分析 (Matt, Vázquez, & Campbell, 1992) から、臨床的な抑うつ及び実験的に誘導された抑うつ気分では、気分一致効果が大きく認められることが示されている。

しかしながら、実際にはその効果が認められるのは部分的であることが多いことが初期から指摘されており (Blaney, 1986)、研究が増加するにつれ、広く一貫して認められる現象ではないという見解が主となってきた (Sedikides, 1994)。たとえば注意課題や自動的処理への影響は認められにくいこと、ネガティブな気分の影響は認められにくいという効果の非対称性などがこれまで指摘されてきている (e.g., Blaney, 1986; 伊藤, 2000; Williams, Watts, MacLeod et al., 1997)。さらにはネガティブな気分においてポジティブな認知が促進されるという気分不一致効果を見出している研究も複数存在する (e.g., Parrott & Sabini, 1990; 榊, 2006)。

近年、自動的処理と統制的処理とでは感情の及ぼす影響が異なることが明らかとなってきたことにより、どういった認知過程にどのように抑うつが影響を及ぼすのかということへの関心が高まってきた。初期の抑うつにおける気分一致効果研究は、上述の Williams, Watts, MacLeod et al. (1997) や Matt, Vázquez, & Campbell (1992) から示されているように、自伝的記憶の想起や実験材料の記憶再生といった意図的な想起を伴う顕在記憶を対象としたものが多い。一方、必ずしも先行学習のエピソードの意識的想起を必要としない記憶は潜在記憶と呼ばれる。臨床心理学的な見地から、認知の無意識的側面における研究の重要性が指摘されている (Williams, Watts, MacLeod et al., 1997) ことに加え、日常生活において用いられている記憶の大半は無意識なものであるとも考えられている (Watkins, Vache, Verney et al., 1996)。このような背景から、潜在記憶に関する抑うつにおける気分一致効果が 1990 年代はじめより注目されるようになった。

3. 抑うつにおける潜在記憶の気分一致効果

初期の抑うつにおける潜在記憶研究では、気分一致効果は生起しないという結果が示されることが多かった。たとえば Denny & Hunt (1992) はうつ病患者と健常者を対象に刺激語の自己関連づけ課題の後、自由再生テスト (顕在記憶)、単語完成テスト (潜在記憶) を実施した。結果、自由再生ではうつ病患者群でネガティブ語が多く、健常者群でポジティブ語が多かったのに対し、単語完成では違いが認められなかった。このような初期の抑うつにおける潜在記憶研究で気分一致効果が認められなかった点に関して、Roediger & McDermott

(1992) は、潜在記憶テスト課題においてデータ駆動型処理が求められるのか概念駆動型処理が求められるのかといった、課題において求められる処理の違いによる影響を指摘している。すなわち、単語完成課題など多くの潜在記憶課題は知覚的過程にもとづくものであるが (Roediger, 1990)、抑うつは意味的な精緻化過程に影響を及ぼすことが想定されており (Williams, Watts, MacLeod et al., 1988)、したがってこれらの研究では抑うつにおける気分一致効果が認められなかったのではないかというものである。言い換えれば、概念駆動型処理を主として要する潜在記憶テストを用いた場合には抑うつにおいて気分一致効果が認められる可能性が考えられるということになる。

1990年代半ば以降、概念駆動型潜在記憶テストを用いた抑うつにおける気分一致効果研究が行われるようになったが、気分一致効果が認められることもあれば認められないこともあり、結果は一貫していない。たとえば概念駆動型潜在記憶テストとして自由連想課題を用いた Watkins, Vache, Verney et al. (1996) では抑うつにおける気分一致効果が認められたのに対し、同一の課題ではないものの同じく自由連想を検討した田上 (1999) では抑うつにおいてポジティブ語の産出量がネガティブ語より多いという気分不一致効果が示されている。また Watkins, Martin, & Stern (2000) は2種のデータ駆動型テストと2種の概念駆動型テストの計4つの潜在記憶テスト課題を実施し、抑うつにおける潜在記憶の気分一致効果を検討した。結果、気分一致効果が認められたのは、単語検索課題 (単語の定義を呈示し、単語を検索してもらった課題) という1つの概念駆動型テスト課題のみであった。最近では、メタ分析やレビュー論文の中で、このような一貫しない結果を説明しようとする試みがなされており (Barry, Naus, & Rehm, 2004, 2006; Phillips, Hine, & Thorsteinsson, 2010; Watkins, 2002; Wisco, 2009)、中でも、検索方法の違い (意図的検索を行うか自動的検索を行うか) や処理の違い (データ駆動型処理か概念駆動型処理か) によって抑うつの影響は異なる可能性が大きいと考えられている。現在もなお議論の分かれているところであるが、同一課題における処理を分離する過程分離手続き (process-dissociation procedure; Jacoby, 1991, 1998) を用いた検討の必要性が課題のひとつとして指摘されている (Watkins, 2002)。

過程分離手続きとは、記憶の自動的な (automatic) 利用と意識的に統制された意図的な (controlled) 利用の2つの過程が共同してパフォーマンスを増加させる条件 (包含条件) と、両者を対置させ、記憶の自動的な利用はパフォーマンスを増加させ意図的な利用は減少させる条件 (除外条件) とを設け、その2つの条件のパフォーマンスから記憶の自動的な利用と意図的な利用を別々に評価するものである (藤田, 2005)。一般的な手続きの流れとしては、まずターゲットとなる単語リストを学習してもらい、その後包含テスト条件と除外テスト条件という2つのテスト条件下で単語完成や語幹完成、単語検索などの手がかり再生を行う。包含テストでは、手がかりをもとに学習語を再生するように、もし再生できない場合は最初に浮かんだ単語を答えるように教示される。一方除外テストでは、手がかりをもとに学習語を再生するよう教示されるが、それは答えず (除外し)、別の単語を答えるよう求められる。学習語以外に単語が思い浮かばなかった場合はパスしてよいことも告げられる。これら2つのテスト条件のパフォーマンスは、記憶の自動的な利用の寄与 (A) と意図的な利用の寄与 (C) から、次のように表すことができる。

$$\text{包含テスト条件のパフォーマンス } I = C + A(1 - C)$$

$$\text{除外テスト条件のパフォーマンス } E = A(1 - C)$$

これを連立させると、 A と C を算出することができる。

$$C = I - E$$

$$A = E / (1 - C)$$

以上の手続き及び数式を用い、同一課題の記憶パフォーマンスにおいて自動的利用と意図的利用を分離し検討することが可能であると考えられている。

田上 (2013) では、抑うつにおける気分一致効果について、学生を対象に過程分離手続きを用いて検討を行っている。結果、意図的利用に関しては、軽度抑うつにおいてネガティブ語の寄与率が低く、非抑うつでネガティブ語の寄与率が高いという気分不一致効果が認められたが、一方自動的利用に関しては抑うつの影響は認められなかった。ただし、実験材料の検討や統制が十分ではなかったことに加え、冊子を用いて集団で実施した実験であり、実験操作がうまくいかなかった参加者が多く、手続き上の問題が大きかったものと考えられる。このことから、実験材料を検討し、さらに個別での実験の実施など実験状況も統制した上で再度検討することが必要であると考えられる。

4. 感情特性の影響の可能性

抑うつにおいて潜在記憶の気分一致効果が一貫して認められない理由として、第二に、何らかの特性の影響・交絡の可能性が考えられ得る。

前述のように気分一致効果はそもそもネガティブな気分では生じにくいという効果の非対称性がこれまで数多く指摘されてきている。最も多くなされている説明は、人は一般にネガティブな感情を嫌うがポジティブな感情は維持しようとするものであるという感情調整の動機づけからのものである。気分不一致効果を見出している研究においても感情調整によるという説明が多い。

気分一致効果研究を整理した Rusting (1998) は、気分一致効果とは別に、感情にかかわる特性 (特性不安、感情調整に関する傾向、パーソナリティ特性など) が一致した感情価を持つ情報の処理を促進する現象を特性一致性とまとめた。気分一致性と特性一致性は概念的には関連しているが、独立に論じられることも多い一方で、気分と特性が交絡しているような研究もあり、これらの研究を統合することの必要性を論じている。Rusting (1998) は、気分と特性が認知に及ぼす影響をどう扱うかによって、従来型アプローチ、調整的アプローチ、媒介的アプローチの3つに分類した。従来型アプローチとは、従来の気分一致効果で一般的に用いられているアプローチであり、気分が認知に及ぼす影響と安定した特性が認知に及ぼす影響がそれぞれ独立に検討されるものである。調整的アプローチは、気分と特性が相互作用的に認知に影響を及ぼすことを想定したものであり、媒介的アプローチとは、安定した特性が一時的な気分を通して (媒介して) 認知に影響を及ぼすことを想定するものである。特性の影響を考慮した調整的アプローチや媒介的アプローチが、気分一致効果の生起をよりよく捉えることができるのではないかと Rusting (1998) は提案している。伊藤 (2001) は共分散構造分析を用いて調整的アプローチと媒介的アプローチによるモデルの比較を行い、適合度指標の値から調整的アプローチにもとづくモデルが適切であると結論づけた。このような感情特性の影響は、主として顕在記憶などの意識的な統制的処理に関して見出されているものであるが、潜在記憶などの無意識的な自動的処理にも影響する可能性も十分考えられ得る。

さまざまある感情特性の中でも、気分一致効果の非対称性や気分不一致効果について気分調整動機から説明する研究が多くみられることから、気分調整にかかわる特性に着目するこ

とが有用ではないかと考えられる。感情に対する比較的安定した全般的態度や、感情体験への対処法略を指すものとして、特性メタ感情という概念がある (Salovey, Mayer, Goldman et al., 1995)。彼らは感情に関する“注目 (Attention)”, “明瞭さ (Clarity)”, “転換 (Repair)”の3因子から構成される48項目の特性メタ感情尺度 (Trait Meta-Mood Scale; TMMS)を開発した。“注目”因子は自身の感情体験に目を向ける傾向, “明瞭さ”因子は感情体験がはっきりと明瞭である傾向, “転換”因子は不快な感情を回復させようとする傾向を示す。日本においては向山 (1998) によって TMMS 短縮版 (30 項目) が翻訳され, 因子分析の結果, “気分の明瞭さ”, “気分への注目”, “気分の転換”, “気分の重視”の23項目4因子構造が見出されている。“気分の重視”因子は Salovey, Mayer, Goldman et al. (1995) の“注目”因子に含まれる項目の一部がまとまったものであり, 行動の指針として感情や気分を重視する態度を表すものと向山 (1998) はまとめている。本研究では気分調整にかかわる感情特性としてこの特性メタ感情に着目する。

5. 本研究の目的

以上から, 本研究では非臨床的な一般学生を対象に, 過程分離手続きを用い, まず従来型のアプローチから記憶の自動的利用と意図的利用への抑うつの影響に違いがみられるかどうか, すなわち気分一致効果が生起するかどうかを明らかにすることを第一の目的とする。そして, 特性メタ感情が抑うつにおける気分一致効果の生起に影響を及ぼすかどうか, 調整的アプローチと媒介的アプローチによって検討することを第二の目的とする。臨床診断を受けていない非臨床的な抑うつ状態を対象としこれらの点を明らかにすることで, 発症への脆弱性として作用する要因, もしくは発症を防ぐ要因を捉えることができるのではないかと, また予防や再発防止を認知的側面から働きかける方法についてのひとつの見解を示すことができ得るのではないかと考えられる。

II. 方法

1. 実験参加者

大学生及び大学院生 32 名 (男性 12 名, 女性 20 名) が実験に参加した。

2. 刺激・材料

過程分離手続きにおいては, 刺激を検討した田上 (2007) にもとづき, ポジティブ語 36, ネガティブ語 36 から成る 72 の性格表現用語とそれに対応する意味手がかりを用いた。これをポジティブ語 9, ネガティブ語 9 から成る 18 語のリストに 4 分割し, それぞれリスト A, B, C, D とした。これらをリスト AB, リスト CD の 2 つにまとめ, 一方を学習呈示リスト, 一方を未学習 (新項目) リストとして, 参加者間でカウンターバランスした。包含テスト条件及び除外テスト条件では, 学習呈示リストの一方 (たとえば A) と未学習語リストの一方 (たとえば C) の 36 語に対応する意味手がかりを呈示した。全ての実験参加者に同じ刺激 72 を用いたが, 学習呈示・未学習, 包含・除外テスト条件へのリストの割り当ては 16 通りとなり, それぞれに対象者を同数配置した。

気分状態の測定においては, 寺崎・古賀・岸本 (1991) による多面的感情状態尺度 (以下 MMS とする) 短縮版を用いた。否定的感情について 3 つ (“抑鬱・不安”, “倦怠”, “敵意”),

肯定的感情について3つ（“非活動的快”，“活動的快”，“親和”）、中性的感情について2つ（“集中”，“驚愕”）の8下位尺度40項目から成る尺度であり、現在の気分を4件法で回答するものである。40項目を1項目ずつディスプレイに呈示し、キーボード入力によって回答を求めた。

特性メタ感情に関しては、向山（1998）による「日本語版特性メタ・ムード尺度」（TMMS）を用いた。向山（1998）では上述の通り因子分析の結果23項目4因子構造が見出されている。MMS短縮版と同様、1項目ずつディスプレイに呈示し、キーボード入力によって5件法で回答を求めた。

抑うつについては、林（1988）によるベック抑うつ尺度（以下BDIとする）を用いた。21項目4件法の尺度であり、得点範囲は0～63、得点が高いほど抑うつ的であることを示す尺度である。BDIについては、B4サイズの用紙に印字し、紙面において回答を求めた。

3. 装置

学習課題、テスト課題の刺激呈示及びMMSとTMMSの項目の呈示はパーソナル・コンピュータ（HP Compaq dx2000）と17インチ液晶ディスプレイ（SAMSUNG SyncMaster 172N）を用いて行った。刺激呈示の制御については、SuperLab Pro 2.0.4（Cedrus社）を用い、黒色の背景画面に白色文字で刺激が呈示された。

4. 手続き

個別に実験を行った。

実験の概要を説明した後、学習課題として自己記述性評定を行った。2語の練習試行の後、ディスプレイ上に学習呈示語36語を1語ずつランダム呈示し、自分に当てはまるかどうかを4件法でキーボード入力してもらった。刺激の表記形態は漢字・仮名まじりであり、刺激呈示時間は反応のキーボード入力までとした。教示文と選択肢はA4サイズの用紙に印刷し、課題の説明時から学習課題の終了時までディスプレイ脇に呈示し続けた。

次にテスト課題として、包含テスト条件及び除外テスト条件の繰り返し2条件（順序はカウンターバランスした）で、手がかり再生を行った。包含テスト条件、除外テスト条件のそれぞれの本試行の前に練習試行を2試行実施した。本試行では学習呈示語と未学習語に対応する意味手がかり36を1つずつランダム呈示した。再生は口頭によって求め、回答の後、参加者自身がキーボードを押して次の手がかりに進んだ。再生制限時間は各30秒とした。包含テスト条件及び除外テスト条件の教示は、課題前の説明に加え、A4サイズの用紙に印字し、課題中はディスプレイ脇に呈示し続けた。

続いて、MMS短縮版、TMMSへの回答をキーボード入力で求め、BDIへの紙面での回答を求めた。

最後に実験の説明を行い、終了した。所要時間は約40分間であった。

5. 倫理的配慮

研究への参加に関しては文書を用いて依頼を行い、参加者の自由意思による参加者本人の署名がなされた同意文書の提出をもって、研究参加の同意が得られたものとした。ただし、その後の参加辞退・中断も可能であることを依頼文書に明記した。このほか、研究テーマ・実験内容・所要時間・問い合わせ先、研究で得られた情報については研究目的以外に使用しない

こと、個人が特定される形での成果の公表は行わないこと、協力しないことで不利益を被ることはないこと、関心のある方には成果を報告することなどを依頼文書に明記した。実験の最後に実験目的を口頭で説明し、結果に関心があるとした参加者に対しては文書によって成果の報告を行った。

III. 結果

1. 抑うつが記憶の自動的利用と意図的利用に及ぼす影響：従来型アプローチからの検討

1) 抑うつ群の設定

BDI 得点をもとに抑うつ群の設定を行った。実験参加者全体の平均は 10.97 ± 6.46 であった。BDI について解説している Williams (1983 中村監訳 1993) にもとづき、0 から 13 点の 23 名 (男性 9 名, 女性 14 名) を非抑うつ群, 14 点以上の 9 名 (男性 3 名, 女性 6 名) を抑うつ群とした。非抑うつ群の BDI 平均得点は 7.78 ± 3.41 , 抑うつ群は 19.11 ± 5.11 であった。なお各群の気分状態を確認するため, MMS 短縮版各下位尺度得点について群間比較を行った。結果, “抑鬱・不安”, “倦怠” 尺度で抑うつ群の得点が有意に高く ($t(28)=2.54, p<.05$; $t(28)=2.28, p<.05$), “活動的快” で非抑うつ群が有意に高い ($t(28)=2.15, p<.05$) ことが示された。

2) 各テスト条件における再生率

包含テスト条件と除外テスト条件別に, 各群における学習呈示語・未学習語の単語の感情価別平均再生率を表 1 に示した。

ベースラインの検討として, 未学習語の意味手がかりから意図された単語が再生された率について, 抑うつ (2; 非抑うつ, 抑うつ) \times 単語の感情価 (2; ポジティブ, ネガティブ) \times テスト条件 (2; 包含テスト, 除外テスト) の 3 要因分散分析を行った。結果, 主効果, 交互作用とも全て統計的に有意ではなく, 刺激に偏りがなかったことが確認された。

表 1 各群のテスト条件及び単語の種類別平均再生率

群	包含テスト条件				除外テスト条件			
	学習呈示語		未学習語		学習呈示語		未学習語	
	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ
非抑うつ $n=23$.62 (0.21)	.46 (0.15)	.11 (0.11)	.09 (0.08)	.08 (0.11)	.08 (0.09)	.11 (0.09)	.10 (0.09)
抑うつ $n=9$.70 (0.21)	.41 (0.18)	.06 (0.06)	.09 (0.07)	.12 (0.09)	.06 (0.06)	.09 (0.11)	.12 (0.10)

()内は標準偏差。ポジ: ポジティブ語, ネガ: ネガティブ語。

3) 抑うつが記憶に及ぼす影響

上述の方程式にもとづき, 実験参加者ごとに自動的利用寄与率 (A) と意図的利用寄与率 (C) を算出した。なお, 包含テスト条件でポジティブな学習語を全て再生した ($C=1.00$) 参加者 2 名については, A が算出されないため, 以下の分析から除くこととした。この 2 名は非抑うつ群 1 名, 抑うつ群 1 名であり, 2 名を除いた各群の BDI 得点は, 非抑うつ群 7.55

±3.29, 抑うつ群 17.88±3.76 となった。各群及び単語の感情価別の自動的利用平均寄与率を図 1 に、意図的利用平均寄与率を図 2 に示した。

自動的利用寄与率について、抑うつ (2) × 単語の感情価 (2) の分散分析を行ったところ、抑うつの主効果、感情価の主効果、及び抑うつと感情価の交互作用の全てが有意であった ($F(1,28)=4.32, p<.05$; $F(1,28)=11.55, p<.01$; $F(1,28)=5.70, p<.05$)。交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、抑うつ群においてポジティブ語の寄与率が有意に高く ($F(1,28)=11.41, p<.01$)、ポジティブ語の寄与率において抑うつ群が非抑うつ群よりも有意に高いことが示された ($F(1,28)=6.73, p<.05$)。

次に意図的利用の寄与率について、同様の 2 要因分散分析を行った。結果、感情価の主効果のみ有意であり ($F(1,28)=12.72, p<.01$)、抑うつの状態にかかわらずポジティブな単語の意図的利用寄与率がネガティブな単語よりも高いことが示された。

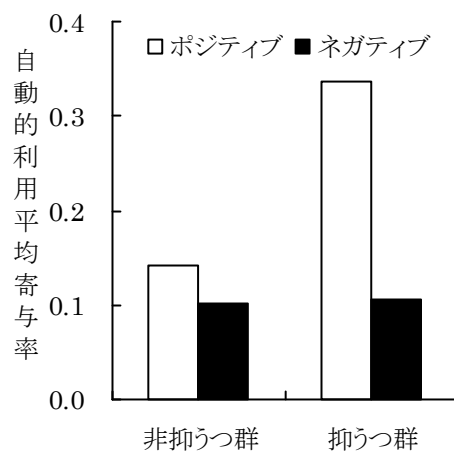


図 1 各群の単語の感情価別
自動的利用平均寄与率

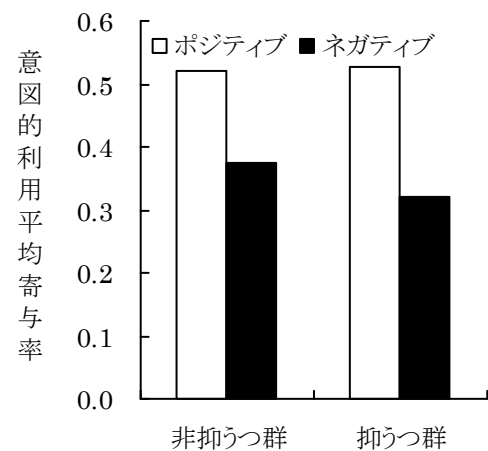


図 2 各群の単語の感情価別
意図的利用平均寄与率

2. 特性メタ感情の影響①: 調整的アプローチからの検討

独立変数を抑うつ、従属変数を記憶の自動的利用と意図的利用の寄与率、調整変数を特性メタ感情とし、抑うつと特性メタ感情とが交互作用的に記憶に影響を及ぼすのかどうか検討した。従属変数に関しては、ポジティブ語とネガティブ語を独立に扱い、それぞれの自動的利用と意図的利用の寄与率について分析した。また特性メタ感情については、4 つの下位尺度それぞれの影響を独立に分析した。

1) 自動的利用の寄与率への抑うつと特性メタ感情の影響

ポジティブ語記憶の自動的利用寄与率を基準変数とし、説明変数として、第 1 ステップに抑うつ (非抑うつ, 抑うつ; カテゴリカル) 及び TMMS 各下位尺度 (“気分の明瞭さ”, “気分への注目”, “気分の転換”, “気分の重視”, それぞれ 1 つずつ独立に分析), 第 2 ステップに抑うつと TMMS 各下位尺度との交互作用項を投入した 4 つの階層的重回帰分析を実施した。TMMS 各下位尺度得点は中心化した値を用いた。抑うつと特性メタ感情の交互作用項を投入した場合に分散説明率が増分する傾向 ($\Delta R^2=0.09, p<.10$) が示されたのは “気分の重視” を調整変数とした場合 ($b=0.07, b\ SE=0.04, p<.10$) のみであった。単純傾斜の有意性の検定の結果, “気分の重視” が低い場合には抑うつの影響は認められなかったが ($b=0.09, b$

$SE=0.09, p=.35$), 高い場合に抑うつの有意な正の影響が認められた ($b=0.43, b SE=0.16, p<.05$)。この交互作用について、統計分析ソフト HAD (清水・村山・大坊, 2006) を用いて作成した単純傾斜のグラフを図 3 に示す。

次に、ネガティブ語記憶の自動的利用寄与率を基準変数とし、同様の 4 つの階層的重回帰分析を実施した。TMMS 下位尺度のいずれを調整変数とした場合においても、抑うつと特性メタ感情の交互作用の影響は認められなかった。

2) 意図的利用の寄与率への抑うつと特性メタ感情の影響

ポジティブ語記憶の意図的利用寄与率を基準変数とし、同様の 4 つの階層的重回帰分析を実施した。抑うつと特性メタ感情の交互作用の影響は認められなかった。

次にネガティブ語記憶の意図的利用寄与率を基準変数とし、同様の 4 つの階層的重回帰分析を実施した。“気分の重視”を調整変数とした場合、抑うつとの交互作用項の影響は有意傾向であり ($b=-0.07, b SE=0.04, p<.10$), 抑うつとの交互作用項を投入すると分散説明率が増分する傾向が認められた ($\Delta R^2=0.11, p<.10$)。単純傾斜の有意性の検定の結果, “気分の重視”が低い場合には、抑うつはネガティブ語の意図的利用に影響を及ぼさないが ($b=0.03, b SE=0.10, p=.76$), 高い場合に抑うつが負の影響を及ぼす傾向にあることが示された ($b=-0.33, b SE=0.17, p<.10$)。先と同様に作成した単純傾斜のグラフを図 4 に示す。

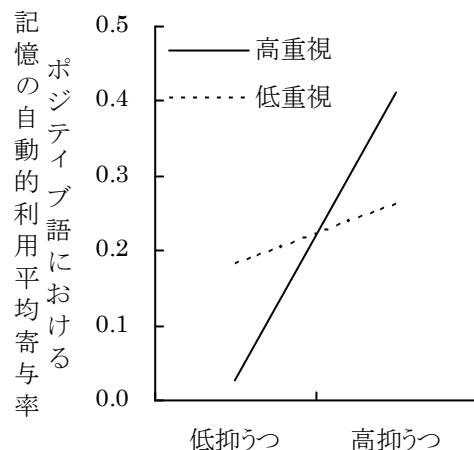


図 3 ポジティブ語の記憶の自動的利用寄与率における抑うつと TMMS “気分の重視” との交互作用についての単純傾斜

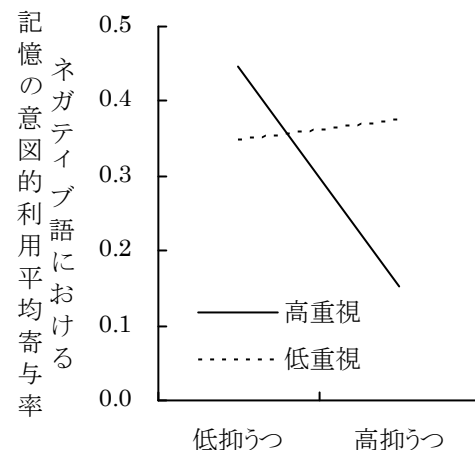


図 4 ネガティブ語の記憶の意図的利用寄与率における抑うつと TMMS “気分の重視” との交互作用についての単純傾斜

注) 直線は、抑うつと TMMS “気分の重視” 得点に、各平均値±1SD の値を代入して求めた単回帰直線である。

3. 特性メタ感情の影響②: 媒介的アプローチからの検討

抑うつを独立変数、記憶を従属変数、特性メタ感情を媒介変数として、Baron & Kenny (1986) による媒介分析を用いて検討した。先と同様、ポジティブ語とネガティブ語の自動的利用と意図的利用の寄与率をそれぞれ独立に検討し、特性メタ感情についても各下位尺度をそれぞれ独立に検討した。はじめに抑うつが記憶に及ぼす影響について単回帰分析を行った。結果、ポジティブ語の自動的利用寄与率に対してのみ抑うつの影響が有意であった ($b=0.19, b SE=0.08, p<.05$)。次に、抑うつが TMMS 各下位尺度に及ぼす影響についてそ

れぞれ単回帰分析を行った。結果，“気分の重視”に対してのみ，抑うつの有意味な影響が認められた ($b=-2.02$, $b SE=0.95$, $p<.05$)。次に，独立変数（抑うつ）及び媒介変数（TMMS “気分の重視”）が従属変数（ポジティブ語記憶の自動的利用寄与率）に及ぼす影響について重回帰分析を行った。結果，抑うつの影響のみ有意であり ($b=0.18$, $b SE=0.08$, $p<.05$)，“感情の重視”の有意味な影響は認められず ($b=-0.01$, $b SE=0.02$, $p=.63$)，媒介モデルは成立しないことが示された。

なお参考までに，特性メタ感情を独立変数，記憶を従属変数，抑うつを媒介変数とした場合のモデルの検討も行った。媒介モデルの前提として，まず独立変数（特性メタ感情の4つの下位尺度）から結果変数（ポジティブ語及びネガティブ語における自動的利用寄与率と意図的利用寄与率）への影響について単回帰分析を用いて検討した。結果，特性メタ感情が記憶に及ぼす影響は全て有意ではなく，この場合の媒介モデルも成立しないことが示された。

IV. 考察

1. 抑うつが記憶の自動的利用と意図的利用に及ぼす影響

抑うつが記憶に及ぼす影響について，従来の気分一致効果研究で一般的に用いられている分散分析によって検討を行った結果，抑うつが高くなるとポジティブ語の自動的利用寄与率が高くなることが示された。すなわち，抑うつにおける無意識的な気分不一致効果が示されたと考えられる。図1をみると，抑うつ群におけるポジティブ語の寄与率のみが突出して高く，他はほぼ同じ高さであることがわかる。概念駆動型潜在記憶課題を用いて非臨床的な抑うつにおける気分一致効果を検討した田上（1999）においても，抑うつ群のポジティブ語のみが突出して多く産出されることが見出されており，これと非常に類似した結果が得られたといえる。過程分離手続きは記憶の意識的想起を求め，その中で自動的寄与率を算出しているため，潜在記憶課題とは異なるものではあるが，非臨床的な対象に概念的な処理を求めた場合には，抑うつにおいて気分不一致的なポジティブな無意識的処理バイアスが生じる可能性が高いといえるのではないだろうか。

2. 特性メタ感情の調整的・媒介的影響

階層的重回帰分析による調整的アプローチからの検討，及び媒介分析による媒介的アプローチからの検討の結果，媒介モデルは成立せず，媒介的アプローチは支持されないことが示唆される。調整的アプローチに関しては，TMMSの“気分の重視”が高い場合，抑うつが高いとポジティブ語記憶の自動的利用寄与率が高く，ネガティブ語記憶の意図的利用寄与率が低いことが示され，抑うつと記憶との関係に特性メタ感情の“気分の重視”が調整変数として影響する可能性が示唆される。

“気分の重視”に含まれる項目は「私の感情は，私に進むべき道を教えてくれる」「自分の気持ちに正直である」「感情に従うべきではない（逆転項目）」「自分の感じていることについて，あれこれ考えるのは時間の無駄である（逆転項目）」であり，これらの内容から，感情を軽視せずに感情体験をそのまま受けとめようとする態度であると考えられる。このような特性が，抑うつにおいて無意識的には気分不一致的なポジティブ刺激の処理を促進し，意識的には気分一致的なネガティブ刺激の処理を抑制するという調整的役割を果たしている可能性が推察される。

3. 総合考察

以上より、抑うつの影響を独立に検討した場合は、抑うつにおいてポジティブな無意識的処理が促進され得ることが示唆された。これまでの気分一致効果研究で気分不一致効果が示されたのは、主に意識的な処理においてであったが、無意識的・自動的な処理においてもそのような働きが生じることが示唆される。本研究の対象は非臨床群であったが、このような非臨床的な抑うつ状態では、無意識的に気分不一致な方向での認知が行われ、そのため悪化することなく軽度のままの状態を保っている可能性があるのかもしれない。

特性メタ感情を変数として加えて検討した場合、感情を軽視せずに感情体験をそのまま受けとめようとする傾向と考えられる“気分の重視”が、抑うつと認知的処理との関係を調整するはたらきがあることが示唆された。認知課題や分析方法は異なるものの、伊藤（2001）においても調整的アプローチがより妥当性のあるモデルであることが示されており、抑うつと認知との関係は感情特性によって調整される可能性が高いのではないかと考えられる。本研究では、気分の重視の傾向が高いと、ポジティブな記憶の自動的利用が促進され、ネガティブな記憶の意図的利用が抑制される可能性が示唆された。非臨床的抑うつにおいては、自分の感情体験をありのまま受けとめようとする傾向を有する場合に、気分不一致な認知的処理が生じるのではないかと考えられる。

このような自身の感情体験をありのままに受けとめようとする傾向・態度は、昨今注目されている第三世代の認知行動療法で重視されている体験に近いのではないかと考えられる。熊野(2012)によれば、第三世代の認知療法ではほぼ共通して、マインドフルネス (mindfulness) とアクセプタンス (acceptance) が重視されているという。マインドフルネスとは、「今の瞬間の現実につねに気づきを向け、その現実をあるがままに知覚して、それに対する思考や感情に囚われないでいる心のもち方や存在のありよう」(熊野, 2012, p.25) であり、アクセプタンスとは「嫌悪的な私的出来事に気づきながら、それと自分(観察している主体)との関係性を変えるための行動をしないこと」「今この瞬間の私的な体験の世界に対して、自動的に心を閉じてしまわないように意図的に努力すること」(p.28) とされている。特性メタ感情の“気分の重視”はこれと必ずしも同じ状態ではないが、少なくとも感情を見ないようにするのではなく、また感情を無理に変えようとするのではなく、あるがまま受けとめようとするような点においては類似しているのではないだろうか。このような、特に感情の体験に対して開かれている態度が、抑うつ状態を悪化させずに、軽度のままの状態を維持したり、あるいは自然と解消に向かったりすることにつながる可能性が考えられ、本研究はこういった介入法にひとつの支持を与え得るものであると考えられる。

4. 臨床への示唆

本研究では感情を重視する態度が抑うつと認知との間に調整的に影響していることが示唆されたが、上述のように認知行動療法におけるマインドフルネスやアクセプタンスの予防的効果を支持するものといえるのではないかと考えられる。すなわち、自分自身のあるがままの体験を受けとめ回避しないこと、無理に変えようとしなないことが、一時的な抑うつ状態からの回復を図り、悪化を予防すると考えられるのではないだろうか。したがって、やや心身の不調が感じられるような段階でそれ以上の悪化を防ぐために、たとえば呼吸法や瞑想法など、マインドフルネスのトレーニングを行うことが効果的であると考えられる。

なお本研究の対象は非臨床群であり、一般化には限界があると考えられるものの、このよ

うな感情特性が高いと認知バイアスが調整されることが示唆されたことから、うつ病の予防や再発防止において、感情体験をあるがまま受けとめる傾向を高めることが効果的である可能性があるといえるだろう。

5. 今後の課題

第一に、本研究は要因を統制した実験室実験であり、日常・臨床場面への適用に限界があるといえる。用いた課題も単語の記憶課題であり、非日常的な認知活動であると考えられる。日常生活における認知活動やふと頭にわいてくる自動思考などへの抑うつの影響にどの程度適用し得るか、さらなる検討が必要であるといえる。今後はより日常的・臨床的な認知を対象とした抑うつ研究の知見も統合し、抑うつの認知メカニズムについてさらなる解明が必要であるだろう。

第二に、本研究は非臨床群を対象としたのみであり、うつ病の理解や援助にそのまま適用することには限界があるといえる。抑うつの問題を広く扱っていくためには、臨床群をも対象とした実証的研究が必要であるだろう。また抑うつ状態をどのようにとらえるのかという点に関しても、1つの自己報告式尺度の得点を基準にしたのみであり、抑うつ状態が真に反映されているのかは十分確かであるとはいえない。面接の実施や複数の尺度の使用など、多面的な抑うつの評価を行うことが望ましいと考えられる。

第三に介入研究の必要性が挙げられる。本研究の結果から、マインドフルネスやアクセプタンスのトレーニングがうつ病の予防や再発防止に有用である可能性が支持されることが示唆されたが、実際に介入を行い、その効果の検証を行うことが課題であるといえる。

謝辞

本研究の実施に際しては、科研費・若手研究(B)「抑うつにおける記憶バイアスに関する認知臨床心理学的研究」(課題番号 16730343)の助成を受けました。また実験にご協力いただいた皆様、執筆に際してご助言をくださいました諸先生方に心よりお礼申し上げます。

文献

- 1) Baron RM & Kenny DA(1986) The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1173-1182.
- 2) Barry ES, Naus MJ & Rehm LP(2004) Depression and implicit memory: Understanding mood congruent memory bias. *Cognitive Therapy and Research*, 28, 387-414.
- 3) Barry ES, Naus MJ & Rehm LP(2006) Depression, implicit memory, and self: A revised memory model of emotion. *Clinical Psychological Review*, 26, 719-745.
- 4) Blaney PH(1986) Affect and memory: A review. *Psychological Bulletin*, 99, 229-246.
- 5) Denny EB & Hunt RR(1992) Affective valence and memory in depression: Dissociation of recall and fragment completion. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 575-580.

- 6) 藤田哲也(2005) 記憶の自動的利用における処理水準効果: 過程分離手続による検討. 法政大学文学部紀要, 50, 125-144.
- 7) 林潔(1988) 学生の抑うつ傾向の検討. カウンセリング研究, 20, 162-169.
- 8) 伊藤美加(2000) 気分一致効果を巡る諸問題: 気分状態と感情特性. 心理学評論, 43, 368-386.
- 9) 伊藤美加(2001) 気分状態と感情特性とが認知に及ぼす影響: 共分散構造分析による検討. 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 566.
- 10) Jacoby LL(1991) A process dissociation framework: Separating automatic from intentional uses of memory. *Journal of Memory and Language*, 30, 513-541.
- 11) Jacoby LL(1998) Invariance in automatic influences of memory: Toward a user's guide for the process-dissociation procedure. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 24, 3-26.
- 12) 越川房子(2010) マインドフルネス認知療法: 注目を集めている理由とその効果機序. ブリーフサイコセラピー研究, 19, 28-37.
- 13) 熊野宏昭(2012) 新世代の認知行動療法. 日本評論社.
- 14) Matt GE, Vázquez C & Campbell WK(1992) Mood-congruent recall of affectively toned stimuli: A meta-analytic review. *Clinical Psychology Review*, 12, 227-255.
- 15) 向山泰代(1998) 気分への注目・気分の明瞭さ・気分の転換: 日本語版 特性メタ・ムード尺度の検討. 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 1003.
- 16) Parrott WG & Sabini J(1990) Mood and memory under natural conditions: Evidence for mood incongruent recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 321-336.
- 17) Phillips WJ, Hine DW & Thorsteinsson EB(2010) Implicit cognition and depression: A meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, 30, 691-709.
- 18) Roediger HL(1990) Implicit memory: Retention without remembering. *American Psychologist*, 45, 1043-1056.
- 19) Roediger HL & McDermott KB(1992) Depression and implicit memory: A commentary. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 587-591.
- 20) Rusting CL(1998) Personality, mood, and cognitive processing of emotional information: Three conceptual frameworks. *Psychological Bulletin*, 124, 165-196.
- 21) 榊美知子(2006) 自己知識の構造が気分不一致効果に及ぼす影響. 心理学研究, 77, 217-226.
- 22) 坂本真士(2002) 抑うつ. 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 4 異常心理学 II. 東京大学出版会, 147-163.
- 23) 坂本真士・丹野義彦・大野裕(2005) はじめに. 坂本真士・丹野義彦・大野裕 (編) 抑うつ
の臨床心理学. 東京大学出版会, 1-5.
- 24) Salovey P, Mayer JD, Goldman SL, Turvey C & Palfai TP(1995) Emotional attention, clarity, and repair: Exploring emotional intelligence using the Trait Meta-Mood Scale. In: Pennebaker JW(Ed.) *Emotion, disclosure, and health*. American Psychological Association, 125-154.

- 25) Sedikides C(1994) Incongruent effects of sad mood on self-conception valence: It's a matter of time. *European Journal of Social Psychology*, 24, 161-172.
- 26) 清水裕士・村山綾・大坊郁夫(2006) 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1): コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用. 電子情報通信学会技術研究報告, 106, 1-6.
- 27) 田上恭子(1999) 抑うつにおける潜在記憶バイアス. 日本心理学会第 63 回大会発表論文集, 567.
- 28) 田上恭子(2007) 抑うつ-記憶研究における概念駆動型潜在記憶テストとしての意味定義課題の作成について. 弘前大学教育学部紀要, 98, 117-125.
- 29) 田上恭子(2013) 過程分離手続きを用いた抑うつにおける記憶バイアスの検討: うつ病対策に向けての基礎的研究. *Asian Journal of Human Services*, 4, 62-76.
- 30) 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一(1991) 多面的感情状態尺度・短縮版の作成. 日本心理学会第 55 回大会発表論文集, 435.
- 31) Watkins PC(2002) Implicit memory bias in depression. *Cognition and Emotion*, 16, 381-402.
- 32) Watkins PC, Martin CK & Stern LD(2000) Unconscious memory bias in depression: Perceptual and conceptual processes. *Journal of Abnormal Psychology*, 109, 282-289.
- 33) Watkins PC, Vache K, Verney SP, Muller S & Mathews A(1996) Unconscious mood-congruent memory bias in depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 34-41.
- 34) Williams JMG(1983) *The psychological treatment of depression*. Croom Helm. 中村昭之(監訳)(1993) 抑うつの認知行動療法. 誠信書房.
- 35) Williams JMG, Watts FN, MacLeod C & Mathews A(1988) *Cognitive psychology and emotional disorders*. John Wiley & Sons.
- 36) Williams JMG, Watts FN, MacLeod C & Mathews A(1997) *Cognitive psychology and emotional disorders*(2nd edition). John Wiley & Sons.
- 37) Wisco BE(2009) Depressive cognition: Self-reference and depth of processing. *Clinical Psychology Review*, 29, 382-392.

ORIGINAL ARTICLE

Trait Meta-Mood and Memory Bias in Non-Clinical Depression, and Preventing the Onset and Relapse of Depression

Kyoko TAGAMI¹⁾

1) Aichi Prefectural University, School of Nursing and Health

ABSTRACT

The present study examined influences of trait meta-mood on memory bias in non-clinical depression. University students ($N = 32$) participated in individual experiments using the process-dissociation procedure, which can separate the contributions of automatic and controlled processing on memory performance. Participants studied positive and negative personality trait words by rating the self-descriptiveness of each word. Then they recalled the words based on presented cues in the repeated, two test condition, the inclusion test condition, and the exclusion test condition, in counterbalanced order. Then, the participants completed the Multiple Mood Scale Short version, Trait-Meta Mood Scale, and the Beck Depression Inventory. The probability of a positive, or a negative studied word automatically coming to mind, or the probability of consciously recollecting the words were calculated by using process-dissociation procedure equations. A two-way factorial analysis of variance was conducted to separately determine the influences of depression. Results indicated that the probability of automatic processing was significantly higher in depressed participants for positive than for negative words, indicating a mood-incongruent memory bias in depression. However, depression did not influence the probability of controlled processing. Then, the moderating, or mediating roles of trait meta-mood on the memory bias in depression was analyzed. The results indicated that attitudes taking account of the mood might moderate the relationship between depression and memory. These results suggest the possibility that an unconscious, mood-incongruent memory bias in non-clinical depression might prevent the progression of depression. The findings are discussed in terms of preventive effects of mindfulness and acceptance.

<Key-words>

depression, memory bias, trait meta-mood, process-dissociation procedure

Received

January 23, 2017

tagamik@nrs.aichi-pu.ac.jp (Kyoko TAGAMI)

Total Rehabilitation Research, 2017, 4:10-24. © 2017 Asian Society of Human Services

Accepted

February 14, 2017

Published

February 28, 2017



- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Masahiro KOHZUKI	Tohoku University (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)



Aiko KOHARA University of the Ryukyus (Japan)	Jin KIM Choonhae College of Health Sciences (Korea)	Toru HOSOKAWA Tohoku University (Japan)
Akira YAMANAKA Nagoya City University (Japan)	Kyoko TAGAMI Aichi Prefectural University (Japan)	Yoko GOTO Sapporo Medical University (Japan)
Atsushi TANAKA University of the Ryukyus (Japan)	Makoto NAGASAKA KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)	Yongdeug KIM Sung Kong Hoe University (Korea)
Daisuke ITO Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)	Minji KIM Tohoku University (Japan)	Yoshiko OGAWA Teikyo University (Japan)
Eonji KIM Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)	Misa MIURA Tsukuba University of Technology (Japan)	Youngaa RYOO National Assembly Research Service: NARS (Korea)
Giyong YANG Pukyong National University (Korea)	Moonjung KIM Ewha Womans University (Korea)	Yuichiro HARUNA National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)
Haejin KWON Ritsumeikan University (Japan)	Nobuo MATSUI Bunkyo Gakuin University (Japan)	Yuko SAKAMOTO Fukushima Medical University (Japan)
Hideyuki OKUZUMI Tokyo Gakugei University (Japan)	Shuko SAIKI Tohoku Fukushi University (Japan)	Yuko SASAKI Sendai Shirayuri Women's College (Japan)
Hitomi KATAOKA Yamagata University (Japan)	Suguru HARADA Tohoku University (Japan)	
Hyunuk SHIN Jeonju University (Korea)	Takayuki KAWAMURA Tohoku Fukushi University (Japan)	

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Natsuki YANO	Tohoku University (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

VOL.4 February 2017

© 2017 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Masahiro KOHZUKI

Presidents Masahiro KOHZUKI · Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ash201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ash201091@gmail.com

Total Rehabilitation Research

VOL.4 February 2017

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Current Situation and Issues of the Sensory Integration Method: Case Analysis of the Sensory Integration Method in Okinawa.....	Haejin KWON , et al.	1
Trait Meta-Mood and Memory Bias in Non-Clinical Depression, and Preventing the Onset and Relapse of Depression	Kyoko TAGAMI	10
Relationship between Psychological Evaluation and Physiology and Pathology on Educational Outcomes of Intellectual and Multiple Disabilities Children.....	Minji KIM , et al.	25
Basic Study for Development of Assessment INDEX about Curriculum of Psychology, Physiology and Pathology for Person with Disabilities: Focusing on Undergraduate Programs of Special Needs Education in Japan.....	Mamiko OTA , et al.	34
Development of the Sexuality Education Assessment Tool based on the Point of View the QOL	Yuki FUNAKOSHI , et al.	47
Comparison of Achievement Degree of Inclusive Education by School Size in Yaeyama Area; Using Inclusive Education Assessment Tool (IEAT) and Case Examples.....	Mitami TERUKINA , et al.	61
A Study on Factor Affecting Educational Assessment in Curriculum of Special Needs School for Physical Disable	Natsuki YANO , et al.	87

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan